
使い魔部！

ガルヴ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

使い魔部！

【Nコード】

N1208Z

【作者名】

ガルヴ

【あらすじ】

使い魔大戦。

それは使い魔同士を闘わせ一番を決める
生か死か勝か敗か。

これはそんな使い魔大戦に出場する契約者と使い魔の物語

のはずだったのだが

「使い魔部を作ります！」

この一言で俺の使い魔生活は大きく変わってしまった

序章「使い魔召喚」

とある世界では使い魔を闘わせ勝敗を競う使い魔大戦なるものが開かれていた20年に一度開催される大会は今年で12回目だった

その大会には優勝候補である三強が存在した

白河家 黒河家 紫河家の三つ

これを人は「河」の御三家と呼んでいた

そしてその一つである白河家の長女・白河和海は使い魔を召喚しようとしていた

「んー……こんなもんかな」

私は中庭で魔方阵を描き切ると満足げに呟く

「姉さん何してるの？」

そこに私の妹、白河夏葉が声をかけてきた

「ん？ ああ使い魔召喚だよ」

「お父さんにお前もそろそろ使い魔の一匹や二匹、召喚してみろって言われてね」

私は魔方阵が上手く描けたこともあり胸を張って言う

「ああ言いそう」

それに対し夏葉は目を閉じて冷静に言った

「でも使い魔召喚なんて本当に出来るの？」

「平気平気！ 散々練習はしてきたし手順通りにやれば絶対成功するよ」

「そっか……」

自信満々な私に大して何処か不安げに夏葉は目を開けて見つめてくる

「まあ見てなつて！」

そう夏葉に告げると私は魔方陣の中央に立ち

カッターで軽く人差し指を切り

「……っ」

その血を魔方陣に塗り付け最後の仕上げをする　と、魔方陣が光り輝き始めた

「あっ……」

「よく見ててね夏葉」

そう夏葉に告げると私は魔方陣から二、三步離れる

「……」

召喚の呪文を唱えると魔方陣が一層輝きを増した

「うっ……凄いなこれはなかなか期待できるかも」

魔方陣はバアツと見えなくなるぐらいの眩い光と暴風を放った

「い、いったあ……」

その魔方陣の暴風で私と夏葉は壁に体をぶつけた

正直かなり痛かった

夏葉はどうやら壁に頭をぶつけたらしく、そのショックで気を失ってしまったようだった

気を失っていないければ今頃泣いていると思う

程なくして、魔方陣の光は収まり魔方陣の中央には人影が姿を現した

「え……子供？」

魔方陣の影響か周囲は霧がかっていた。

次第に霧が晴れてくると魔方陣の中央に立っているのが黒髪の少年ということが分かった。

年のくらは小学生ぐらいか

「なんだこじ」

黒髪の少年は戸惑った様子で周囲を見回した

「……………」

私は恐る恐る近寄る

「ん？ なんだてめえは」

私が近寄ると少年は警戒したように身構えた

ふと私が少年の頭上に目をやるとカードが光輝いていた

あれがどうやら契約用のカードらしかった

「なんだ無視すんじゃねえ！」

私がカードを見て、そんなことを考えていたら無視されたと思ったらしくキツと睨みをきかせてきた

「それにしても……………使い魔だからもつと雄々しい感じを想像してただけだなあ」

「なんだと？ 俺は充分雄々し」

「はいはい」

少年の言葉を遮り頭上に輝くカードを取る

あれ何枚がある」

三枚ぐらいあつて姿が少年を大きくしたような

だいたい二十代半ばぐらいのやつと高校生ぐらいのやつ、そして今の少年の姿が描かれた三つのカードが

「くつくつくつ！ 俺を無視するとは良い度胸だ！」

カードに夢中になってしていると少年が私に蹴りを繰り返して来る。が、動きは寸前で止まった

あつ

私が声を漏らすと

うぎゃあああつ！」

少年の体が雷鳴に輝いた

いや本人の感覚としては電撃が走ったという方が正しいかもしれない
な、なんだ今の……………まさかお前か！ お前が俺に攻撃を」

息を切らし地面に四つん這いになりながら睨みつけて言う

「違うって。使い魔は契約者に攻撃出来ないんだよ」

私は事実だけを淡々と言った

「使い魔？ どういうことだよ」

さつきも言ったはずなんだけど

どうやらそこだけ聞いていなかったようだった

「あのね、君は私の使い魔になるべくして召喚されたの」

私は軽く溜め息をつき、言う

「使い魔……」

「そう、君が私とこういう風に会話出来るのも私の使い魔候補だからなんだよ」

私が告げると少年はさつきまでの元気が嘘のように表情を曇らせた

「……信じられないな」

「まあ直に分かるよ。ところで君、名前は？」

「名前か。名前は……アーク。アーク・アースガルナだ」

「アークくんね」

「……アークでいい」私が呼び方を決めると即答されてしまった

「了解。じゃあとりあえず上がって？ ほら夏葉起きて。風邪引くよ」

「ふえあ？」

私は夏葉のところまで歩き、体を揺さぶり起こした

夏葉を起こすと私達は居間へ上がる

「驚いた。まさか姉さんが本当に使い魔を召喚しちゃうなんて」

「えへへ……まあね」

「まだ使い魔になると決まってるじゃないかな」

私と夏葉が召喚成功の話題で盛り上がっているとアークは目を細め
機嫌悪そうに言った

「あれ怒ってる?」

「当たり前だ。さつさと俺を元の世界に還せ」

そんなアークの言葉に私と夏葉は顔を見合わせる

「な、なんだよ……」

そんな私達の態度にアークは不安そうに言った

「知らないみたいだから言うけど今度の使い魔大戦が終わるまで……

……つまり開催から1年経過しないと君を元の世界に送還することは出来ないんだよ」

私は冷静に言う

「な、なんだと……?」

アークは目を見開き驚愕の表情を浮かべた

「うおーい……帰ったぞー」

そんな時、玄関の方から声が聞こえた

「なんか誰か来たみたいだが」

「いいよ放っておいて。いつもの事だし絡まれたら」

私アークに言い終える前に襖が開かれる

「おい出迎えなしか! 父さん悲しいぞ」

そこに少し悲しげな表情をした私と夏葉の父・白河和鷹が立っていた

「あ、ごめんなさい」

夏葉が謝る

「……どーせ白河組のみんなと呑んできたんでしょ酒臭いし」

私がジト目で父さんを見ながら言う

「夏葉は優しいなあ……それに比べて和海、もう少し言い方というものがあるだろう」

そしてスカズカと中へ入ってくる。

「なんだお前達の父親……か」

そこにアークが多少戸惑いつつ言った

「む……貴様は」

父さんがアークに気付き目を細め、睨み付けるように見つめる

「その人、姉さんの使い魔になる人なんだ」

ちよつとした緊迫した雰囲気打ち消すように夏葉は明るく言った

「使い魔……？ ほづ。使い魔召喚に成功したのか」

すると父さんは夏葉の言葉を聞き、興味深そうにアークを見る

「な、なんだよ……」

「おい和海、契約はまだなのか」

父さんはアークから視線を外さずに言う

「え？ ああ、うん……それはまだ」

私は正直に契約を正式には交わしてないことを話す

「ふむ……では貴様が使い魔としてどのぐらいの力を持っているか
ワシが直々に調べてやるう」

その一言に私達は驚く

「そんなこと出来るの……？」

と夏葉が言う

「無論だ。使い魔カードさえあればな」

父さんは私達の顔を見比べると不敵に笑った

「使い魔カードって？」

「何を言っている。召喚成功と共にカードが現れるだろう？ あれ
がそうだ」

父さんの言葉に夏葉は首を傾げる

「もしかしてこれのこと？」私は懐から先程手に入れたカードを取
り出し、父さんに見せた

「おおそれだ。これがなければ調べる事はおるか契約も出来ないか
らな」

私からカードを取り上げると父さんは分厚い魔導書を開く

「それって」

「まあ見ておれ」

魔導書の一部分には丁度カードが入るようなへこんだ部分があった。それ以外には使い魔名・使い魔クラス・使い魔ランク等が書かれていたがそれ以外は空白だった

「これでよし……」

父さんはそのへこんだ部分にカードを置く。するとカードは上手い具合に埋まった

「認証中…… 使い魔カードを確認しました」
すると突然魔導書から声が聞こえてきた

「父さん……これって」

「うむ。これは使い魔の強さを測ることが出来る優れたものの魔導書だワシも使い魔を召喚した時は驚いたものよ」

私の問いに父さんは懐かしむように言った

「ではまずは総合戦闘力からだ」

父さんが命令口調で言うのと魔導書から機械的な音が鳴り始める

「ピー…… 総合戦闘力・測定不能」

「何……？まあいい。では次は使い魔ランクと使い魔クラスだ」

魔導書から聞こえる声に不服そうに言った

「使い魔名・アーク・アースガルナ。使い魔クラス・超大魔王級。

現在の使い魔ランクはダブルエー」

「大魔王級でダブルエーだと……」

「それは魔力不足によるもの。召喚時の魔力が必要魔力値を下回っています」

「なるほど魔力不足か……」

父さんは私をちらつと見た。笑っていたけど顔をひきつらせていた

「な、何？」

「……では早速契約を済ませるとするか」

私の言葉は軽くスルーされてしまった

「何言ってるんだ。俺は使い魔になるつもりなんてないぞ」
「ははははっ！ 貴様は今度の使い魔大戦が終わるまで還る事は叶わぬのだ。それまでこの世界を楽しむ方が良いと思うのだが？」

「……………」

父さんの言葉にアークは黙ってしまった

「まあ契約はすぐに終わる。貴様と和海が“繋がる”だけだ」

「繋がる？ どういう意味だよそれ」

「やれば分かる。和海、さっさと契約を済ませろ」父さんは意味深なことを言っただけに使い魔カードを投げ渡す

「あわわわ……………わ、分かってるよ」

どうにかカードを受け止めると私はアークに近寄り、視線を合わせるように膝立ちした

「じゃあいくよ」

私はアークを真っ直ぐ見つめた。返事は返ってこなかった
私はそれを無言の了承と受け取る

「……………」

使い魔カードをアークの額に当て、同時に目を閉じて念じる

「（アーク・アースガルナを私、白河和海の使い魔と成せ）」

「（触媒となるモノはあるか）」

「（妖刀・夜桜。これをそのモノとする）」

「……………確認した。只今より、契約者の知識を使い魔に与える。それが完了と共に契約者と使い魔は“繋がり”本契約は完了とする」
私は使い魔カードとそんなやり取りをした。使い魔カードが最後に言うカードはより一層光り輝いた

「うぐあ！？ なんだこの感覚は……………」

しばらくするとアークは突然頭を押さえて苦しみ出した。

そんな様子を私達はただ見つめて

「心配するな苦しいのは一度だけ。すぐに収まる」

「ふざけ……んな……」

父さんが淡々と言う。その言葉を聞いて糸が切れたようにアークは倒れ、意識を失った

序章「使い魔召喚」(後書き)

日常やバトルに恋愛など色々やっていけたらなと思ってたりします。まだまだ始まったばかりなので頑張って書いていきたいと思ひます

では

第1話「使い魔、はじめてのがっ」

「ん……」

俺は目を覚ますと天井が目に飛び込んできた。体を起こし、ふと周りを見渡す

目に入ってくるのはどれも目新しさはない。質素なものだった
「あれ起きたんだ」

「お前は……」

ガチャツという音と共に扉は開かれ、一人の少女が入ってきた

「白河和海。君の御主人様だよ？ アーク」

「御主人様…… ああそうか俺は」
俺は暫しその少女を訝しげに見ていたが。その一言で思い出した
俺はこの白河和海 しらかわ かずみ とかいう訳が分からない女の
使い魔にされてしまったんだ

「そう。君は私の使い魔」嬉しそうに微笑むポニーテールの少女。
ちよつと可愛いと思ってしまった
もちろん他意はないが

「俺は別に使い魔になりたくてなったわけじゃねえからな」
俺は無表情で言う

「分かってるよ。なってくれてありがとね」

「じゃあさっさと下りてきてね？ ごはんだから」

礼を言うと部屋を出ていった

「はあ……それにしても、まさか俺が使い魔なんてものになっちまうとは」

「世の中、何があるか分からねえな」
渋々、俺はベッドから降りて部屋を出た

「……階段か」

どうやら俺が寝ていた部屋は二階だったらしく階段があった二階には俺が寝ていた部屋とは別に部屋がいくつかあった

多分、下りてこいと言っていたのは階段を下りてこいということなんだろうな。

まだこの世界の環境に慣れていない俺は一段一段ゆっくりと下りていく

「ようアーク。昨日はよく眠れたか？」

俺が下り終えるやいなや話しかけてきたのは確か和海達の父親・白河和鷹だった。名前は聞いた覚えはなかったが何故か知っている不思議だ

「ああ、おかげさまでな」

「そいつは良かった。さあ座れ」

俺は和鷹 かずたか に座るべき場所を指差されると素直に座った

「おはようアークくん。今日から同じ学校だね！」

「は？ 何の話だよ」

いきなり夏葉 なつは が笑顔で訳の分からないことを言い出した
「ああ言っただけだったのか。お前は夏葉と同じ小学校に今日から通
うんだ」

「待て。俺はそんなことは聞いてな」

「もう決まったことだ諦めろ。ガキを一人、家に置いておくわけに
はいかん……和海も学校があるしな」

和鷹は俺の言葉など一切聞かず捲し立ててきやがった

「ごめん言っただけだった。アーク、三日三晩寝てたし」

和海が申し訳なさそうに謝る。だが理由が納得いかなかった

「だいたい俺がガキってどういうことなんだ。俺は立派な大人だ！」

「ほう立派な大人か……夏葉、現実はどうなってるか見せてやれ」

和鷹は俺の怒鳴り声にも全く動じず笑い混じりに夏葉に言った
「う、うん……」

夏葉は言われた通りなのかは分からないが手鏡で俺の姿を映し出した

「！ な、これは……」

俺は映し出された自分の姿に驚かずにはいらなかった。
目を疑ったが夏葉はその間にも律儀に手鏡を上下に動かして満遍な
く見せて俺に現実を突き付けてきた

「とにかく、ちゃんと夏葉と学校行くんだぞ」

「なんで小学校なんだよ……せめて和海と同じ学校に」

「それは無理だな。何せ、お前の今の姿では無理がありすぎる」

「……………」

その後も何か言われた気もしたが覚えていない。飯も食ったがこれも同様だ

「それではな。行ってくる」

和鷹は何十人という強面な男達を引き連れて家を出ていった

「あいつはいつたいどんな仕事してるんだ」

「あははは……まあ知らない方が良い事もあるよ」

俺の呟きに和海が苦笑い混じりに言った

「じゃあ私も準備してくるから」

そう言っつて和海は二階へ上がっていった

「……………アークくん」

「? どうかしたか夏葉」

夏葉は何か言いたそうに俺を見てくる。

和海がいないせいか、なんか気まずい雰囲気流れる

「えっとね、わたしと同じ学校行くの嫌……………」

暫しの沈黙の後、夏葉が言いにくそうに、だが真っ直ぐに俺を見つめて言った

「へ? 別にそんなことはないぜ?」

「本当？ でも姉さんと同じ学校の方が良いって言ってたよね。だから、わたしと学校通うの嫌なのかなって不安で」
なんだこの言い表せない気まずさは

「………………。あーやべえーすげえ夏葉と学校通いたくなってきた！」

俺は数秒間の沈黙の後、その雰囲気になんとも耐えられなくなり夏葉の表情を窺うかがいながら、少々わざとらしくさも理解した上で言った

「なーんだそうだったんなら、そうだって言えばいいのに」

そこに和海が制服姿で下りてきて、ニヤニヤ笑いながら声をかけてきた

「なんだよその笑いは」

ジト目で俺は和海を見る

「うっん別にーただ夏葉と仲良くなったみたいで良かったなってね。はいこれ」

和海は俺に手のひらサイズの剣型のアクセサリーを手渡した

「なんだこりゃ…………」

「それは君の武器。その名は妖刀・夜桜」

「使い魔バトルの時に使うからなくしたら駄目だよ」

和海は真面目に語った

「そんなに大切なものなのか分かった。なくさない」
そう宣言した時だった。

剣型のアクセサリーこと妖刀・夜桜は俺の手に馴染むように溶け、消えてしまった

「え？ あれ？」

「ちょ……言ってるそばから何やってるの！」

和海は目を見開き声を上げた

「えっとその……」

「……姉さん。もう時間が」

夏葉が時計を指差して言った

「仕方ない。これは帰ってから考えるしかないね」

和海は呆れたように嘆息した

「じゃあ行こう」

その一言で俺達三人は家を出た。

「なんか見られてないか？」

暫く歩いているといくつかの視線が俺達、三人に注がれていることに気付いた

「あー……そうだね」

俺が二人に訊くと夏葉は曖昧に笑って、和海は触れてほしくない感じに言った

「すげえ気になるんだが」

ちなみにその視線に気付くとどんな奴等が俺達を見ているかはすぐ

分かった。和鷹が引き連れていた男達の仲間のようだった

「まあ気にせずに行こう。」

和海は凄く触れてほしくないといった様子で俺に目を一切合わせてくれなかった

それから空気を察して何も言わないことにした

「さあ着いたよ。ここから分かれ道だから」そこには鑑ヶ丘学園と書かれ、矢印で初等部・中等部・高等部とそれぞれ違う道が示されていた

「え……そうなのか？」

「うん。ここからなら夏葉でも分かるから案内してもらって？　じやあまたね」

そう告げると和海は高等部の道を歩いていった。姿が見えなくなるまで何度か手を振っていた和海も夏葉も。

ちなみに俺は手は振らなかった

ちなみに恥ずかしいからとかじゃない。一応、自分で自分に言い聞かせておく

「それじゃあ行くか」

「う、うん」

夏葉と共に初等部への道歩く

当たり前だが、さっきまでは小中大と大きさは違った奴が色々いたが気付くと同じような身長の高さの奴ばかりになる。

これが小学生というやつか

それからしばらく歩き校舎へ入った。下駄箱とか上履きというものを履かないといけないなど、色々夏葉に教えてもらった

「おはよー!」

夏葉は元気よく声をあげながら教室へ入っていった。

家では控えめというか、大人しかった夏葉にこんな一面があることに俺は驚いていた

「アークくん？」

「ああ悪い！」

しばらく立ち尽くしてしまっていた俺は急いで教室に入った。すると急に教室中が騒がしくなった

「夏葉ちゃん、おはよー」

そこに金髪の幼女がニコニコしながら俺達に近寄ってきた

「うん、おはよう月女ちゃん」

「月女？」聞き覚えのある名前に俺はその月女 つきめ と呼ばれた金髪幼女を目を細めて見る。髪の毛の長さは短めだ

「あれ？もしかしてお兄ちゃん……？」

「へ？お兄ちゃんって？」

月女は目を丸くしてそう言った。月女がお兄ちゃんと呼んだことに夏葉は驚いていた。もちろん俺も

「月女って……“月下の女神”の？」

「うん！そうだよ。アークお兄ちゃんだよね？」

俺が頷くと嬉しそうに俺の両手を掴み、ぶんぶん振ってきた。月下の女神というのは月女の二つ名だ

周りが更に騒がしくなる。どうやら俺達以外のやつらも俺と月女が知り合いだったことに驚いてるみたいだった

「なんか騒がしいな……はい、みんな席に着いて？先生が来ましたよー」

先生と名乗った明らかに俺達より背が高い女が入ってきて、指示を出す

すると大人しく椅子に座り、さっきまでの騒がしさが嘘のように静かになった

「あれ？ 君は」

当然、座るべき場所などない俺は一人立ち尽くしていた。夏葉と月女は俺を置いて座っていた

すぐにそれに気付いたのかこちらを向き言った

「もしかして今日、うちのクラスに来る子？」

「ああ、そうだ」

俺は頷く

「えー……なんで職員室に来てくれなかったの？ 転校生を紹介します！ みたいなこと、やりたかったのに」

「あ……忘れてた」

急に子供のように残念感いっぱいと言う先生。その言葉を聞いた夏葉はハツとした様子で下を向き、呟いた

「でも仕方ないよね。もう来ちゃったんだし……」

しょんぼりする担任らしき先生。なんだか申し訳ない気持ちになっ
てくる

「それ、やってもいいぜ？」

俺が空気を讀んだつもりで言う

「ううん良いの。それよりこっちに来てくれる？」

「ああ、分かった」

俺は先生と並ぶように教壇へ立った

「では改めて紹介しますね。ルミナス・アースガルナくんです」
先生は軽く咳払いをして俺の名前を大きな声で言った

「知ってる人も居るかもしれませんが、アークくんは月女ちゃんと同じく使い魔として異世界から召喚されてやってきました」

俺が使い魔だつてこと知ってたのか。月女もそうだと何となく分かつてはいたが

「環境の違いなど色々あるとは思いますが月女ちゃん同様に仲良くしてくださいね？」

教室中から「はい」「はい」というお決まり感のある声が一斉に聞こえる

「ではアークくん、一言お願いします！」

「えっ……あーっ、色々迷惑かけちゃうかもしれないがよろしくな？」

いきなりのフリに俺は当たり障りのないような言葉を言った

「うんうん。じゃあアークくんの席は……月女ちゃんの隣ね」先生は満足したように笑顔で頷く。そして教室を見渡し月女の隣の席を指差した

それは窓際で一番左で三番目に位置していた。

「やったーお兄ちゃんと隣だね！」

「ああこれからよろしくな？」

俺は席に着き、隣の席の月女に改めて挨拶をした。同じく使い魔の月女が隣ということもあって俺は少し安心した。もしかしたら最初からここに決まっていたのかもしれない。ちなみに夏葉は月女の後ろの席だった

そしてしばらく授業が続きまだ教科書を持ってない俺は月女に教科書を見せてもらった。

夏葉含め、他の生徒達の視線が痛かったが。

それから昼休みになると質問攻めを食らい、質問攻めは昼休みが終わるまで続いた

正直かなり疲れた

「……長いな」

更に授業が続いて、帰りの挨拶も済ませると生徒達を帰っていた
「そうだアークくんは帰る前に職員室に来てね」
そう言つて生徒に混じり先生は教室を出ていった

「はー……まだあるのか」

机に突つ伏し、何もかもが初めてで疲れてぐったりしていると

「お兄ちゃん大丈夫？」

「アークくん、ついていった方が良いよね？」

「ああ。出来れば場所が分からねえから職員室までお願い出来るか？」

月女と夏葉が声をかけてきた

俺はそんな二人の言葉に甘えることにした

「それじゃあ行こつか」教室を出て二人に職員室前まで案内される

「ありがとな？ 助かった。先に帰つてて良いぜ？」

「えー……でも」

俺の言葉に二人は反対した

「遅くなるかもしれないからな。道も覚えだし、大丈夫だから心配しなくても良いぜ？」

「うー……分かったよ。仕方ないなあ」

渋々だが二人は帰つていった

「よしいくか」

月女と夏葉が見えなくなると職員室へ入る

それを担任ではない男の先生に注意されてしまった

その後は担任の先生は岩崎という名前であることが判明。そして色々学校で必要なものを持たされて職員室を後にした

「結構遅くなっちまったな」

下駄箱で靴に履き替え校舎を出る

「随分暗くなっちまったな」

空を見上げるとすっかり夜になっていた星も見える

「さつさと帰って休みたいぜ……」

この時、俺はまだ思いもしなかった。まさかあんな面倒な事をやらないといけなくなるってことを

第1話「使い魔、はじめてのがっこう」（後書き）

アークの学校での生活が始まりました

次回より物語が動き始めます色々

やっとあらすじに追い付くよーっと言った感じですかね

楽しく書いていきたいです

では

第2話「使い魔のための部を作ろう」(前書き)

一部修正しました

第2話「使い魔のための部を作る」

俺が鑑ヶ丘学園に来て二日目の昼休みの時間。

唐突に月女 つきめ が俺と夏葉 なつは に話があるから放課後に教室に残ってほしいと言ったんだ

そして今は放課後だ

「それで話ってなんだ？」

俺は教壇に立つたまま話を進める様子がない金髪幼女の月女に尋ねた俺が言つと夏葉も興味を示した様子で月女を見る

「使い魔のための部活を作りたいと思います！」

「は？（へ？）」「」

月女の発した言葉に俺と夏葉はほぼ同時に間抜けた声を出し、月女を信じられないものを見るような目で見る

「使い魔のための部活を作るってどういうことだよ」

「いい質問ですねえー」

いきなり説明が好きそうな何処かの先生のような口振りで話す月女。ツッコミたかったが耐える

「実はですねー月女が部活に加わりたいてって言っても入れてくれな
いんですよ！」

「入れてくれない？」

月女の言葉に首を傾げる俺

「うん。なんかね使い魔お断り！ みたいな感じなの」

「使い魔お断り？」

「使い魔って部活とかはやらないんじゃないかな……？ 使い魔が呼び出される理由って多くは使い魔大戦のためだし。実際、使い魔が部活やってるなんて話は聞いたことないし」

俺がきよんとしていると夏葉が最もな理由を述べる

「だから月女はその使い魔は部活しないなんていう常識を変えたい

んだ。使い魔だって色々やりたいと思うもん……闘うだけが使い魔じゃないぞーってところを見せてやりたいよ」

「……使い魔が学校通ってるのもかなり珍しいと思うけどな。」

「でもやっぱり無理なんじゃ……」

「ある人は言いました。ないなら作ればいいじゃないって」

夏葉の無理という言葉聞いてか月女が突然、名言がどうかは分からないがそんなことを言った

「確かにそうなんだけどな」

「でも難しいよ……」

だが俺たちは無理だと思えなかった。何故なら夏葉は違うが、俺たち使い魔はこの世界の住人じゃないから部なんて作っても迷惑にしかならないと思ったからだ

「……………」

俯いて黙り込む月女。

「まあせめて、顧問が居て部室があればな
俺は呟くように言う」

「顧問が居て、部室があればいいの……」

「え？ ああ、多分な」

俺の言葉に月女は顔を上げ涙声で言った。それに俺は頷く

「分かった。分かったよ……絶対に月女が顧問と部室を確保してみせるから！」

月女はそのまま教室を出て行ってしまった

「大丈夫かな月女ちゃん……」

「まあ無理だろうな」

月女が出ていった後に夏葉が呟く。

月女が出ていってやることもなかったから俺たちは真っ直ぐ帰った

その日から翌々日。再び月女に俺と夏葉は放課後、教室に残るよう
に言われた

「それでどうだったんだ」

放課後になって俺達三人だけになると俺は月女に訊く

「顧問も部室もオーケーだって言われたよ!」

月女は満面の笑顔で元気よく言った

「ほ、本当かよ」

「凄い。本当なら凄いや月女ちゃん」

驚愕する俺に対し、夏葉は心の底から喜んでるようだった

「でも条件がありました」

「条件?」

月女はちよつと控えめに言った。その一言で夏葉も笑顔から一転、
真剣な表情に変わる

「うん、それはね」

月女が出された条件とは部員が最低四名必要というものだった。使
い魔だけで四名か

ちなみに部員は小中高は問わないらしい。つまり初等部だけじゃな
く中等部と高等部の生徒に入部してもらってもいいということだ

「いくら小中高問わないって言っても四人は無理だろ」
「大丈夫大丈夫！ お兄ちゃんと夏葉ちゃんが入部してくればあと一人、入部してもらうだけで良いから！」
「なんかとんでもないことを言い出しやがった」

「えっ……でもわたし、契約者でも使い魔でもないよ？」

確かに夏葉は契約者 マスター でも使い魔でもない一般人で、むしろ無関係であるべきはずだ

「関係ないよそんなの。夏葉ちゃんは月女やお兄ちゃんの友達なんだから」

意味が分からなかったが多分、月女は契約者や使い魔だからという理由で夏葉を仲間はずれにはしたくなかったんだろうな

「う、うん……ありがとう月女ちゃん」

どこか嬉しそうにはにかむ夏葉。これが友達ってやつか

「それじゃ、部員募集の貼り紙を書こう！」

「貼り紙って……まだ正式に決まったわけじゃないのに良いのか？」

「使い魔の部活の部員募集だからね……反対とかありそうだけど。前例ないし」

「大丈夫だよー先生に許可取るから」

心配する俺たちを尻目に笑顔で言う月女。

「そっいえば顧問って誰に決まったんだ？」

「あーそれは岩崎先生に決定したよ！」

俺の問いに月女は人差し指と中指を立ててピースサインを作り、笑顔で言う

「なるほどな。通りで……」

岩崎とは俺たちの担任の教師だ。

「じゃあ月女が書くね！ふーふーん」

月女は絵を描き始める。鼻歌混じりに

「はい！ できたよ」

月女は完成すると俺たちに見えるように机の上に置いた

「こ……これは」

「な、なんとというか独創的だね」

とてもひどかった。絵もそうだが、字も解読不能という感じだった。夏葉が言った独創的という言葉に俺はモノは言い様だと思わされた

「えへへ……そうでしょ？」

夏葉の言葉に月女は自信ありげにない胸を張った。

とても好意的に受け取っているのが見てるだけで分かった

「ボツだな」

「えーっ！？ なんで？」

俺が却下の意を示すと月女は不服そうに言う

「これは無理だ。とてもじゃないが見た奴が理解出来ない」

「でも夏葉ちゃんは褒めてくれたよ？ 独創的だって！」

独創的。確かにそうだ

だがそれ以外に言い表せる言葉が見つからなかった

「はつきり言うぜ？ 時代がお前に追いついてないんだよ……」
「じ、じだい？」

月女は俺の言葉を聞いて、目を丸くする。
だが月女は引かずに尚も食い下がる

「で、でもでも！ 同じ使い魔が見るんだからきつと大丈夫だよ！」

「ここで残念なお知らせだ。同じ使い魔であるはずの俺も理解出来なかつたわけだが」

俺は然も残念というような感情を込めて月女でも分かるように
いや分からせるように言った

「むー……分かったよーでもお兄ちゃんは月女より上手く書けるの？」

「ははっ！ 当たり前だ。俺は何でも出来るからな！」

紙を出して、鉛筆でサラサラつと書き上げた

「ほら見てみる！ これが俺の力作だ」

俺は紙を月女が書いたものの隣に置き自信満々に言う。当然だ俺は
何でもこなせるからな

「どれどれ？ うわあっ……お兄ちゃんも月女とそんなに変わらな
いよ」

「確かに。字は上手いんだけど絵は……」

……予想外だった。

予想外に俺の力作は否定されてしまった

「どういうことだよ」

「いや、字は上手いんだけど」

「そうそう字はね。でも絵が」

俺が月女と夏葉に尋ねると絵が駄目というような言い方をされてしまった

ただ月女にだけは言われなくなかった

「じゃあ次はわたしが書くね？」

今度は夏葉が紙を出して描き始める

「あっ」

「う、上手い」

夏葉は慣れた手付きで描き上げていく。

まだ途中だというのにその絵の上手さは伺えた

「はいおしまい」

俺たちと同じように絵が描かれた紙を並べる夏葉。

だが完成品を見ると俺たちとは圧倒的な差がついてしまっていた

「すごいよ夏葉ちゃん！ 夏葉ちゃんので決まりだね」

ペガサスや狼、兎など可愛くデフォルメされていて目を惹くような感じだ

「意外な才能だな」

「あははは……お父さんの趣味が絵を描くことだから色々教えても

らってるからかな？ 別に才能とかじゃないからね？」

“お父さん”和鷹か。あのおっさん、趣味は絵だったのか意外すぎるぜ……

「そうなんだー月女にも今度教えてー？」

「うん！ 全然いいよ？」

月女と夏葉で盛り上がり始める

「それじゃあこれで決まりだな」

俺は夏葉の描いた絵を見ながら言った

「そうだね。じゃあアークくん、仕上げお願い」

「仕上げ？」

「わたし、アークくんより全然字が下手だからお願いしたいかなって……」

適材適所というやつか。どうやら部員募集の煽り文は俺が書くことになったみたいだ

「分かった。俺に任せろ」

俺は夏葉の言葉の返答としてそれを快く承諾する。

「ありがとうアークくん」

そして紙に収まるように煽り文を書いていく。

「やっぱり上手いね」

「そうか？」

「お兄ちゃん、契約者の漢字の記憶を上手く伝えられたんだよ。たぶん」

月女はよく分からないことを言い出す

「どついう意味だ？」

「え？ だから契約者の記憶を上手く伝えられたんだよ。いらぬ記憶とみなされたら処理の段階でおとされるの……月女は絵も漢字も書けなくて良いって判断されちゃったからさっきみたいなのに」

「よく分からねえが要するに必要な記憶とそうじゃない記憶で分けられるってことか」

月女の言い回しは少し俺には難しい。月女の言葉をまとめる形を取って言ってみた

「簡単に言つとそんなとこかなあ」

「そつか。よし出来たぞ」

月女は頷く。そして煽り文を書き終えた紙を月女に手渡す

「ありがとうお兄ちゃん！ じゃあ月女、先生のところに行くねー！」

教室を出ていく月女

「あつ、先に帰つてていいよー」

そのまま職員室に直行かと思つたら一度立ち止まり、俺たちに言った

「ああ分かつた」

「うん！ じゃあねーお兄ちゃんに夏葉ちゃん」

今度こそ月女は駆け足で去っていった

「じゃあ帰るか」

「うんそつだね」

そうして、その日は真つ直ぐ帰宅した。

そして翌日の放課後

「昨日、あのあと部員募集の貼り紙のこと先生に話したら一時的に
なら部として認めてくれるって言われたよ！」

月女はいつものように教壇の上に立ち、嬉々とした様子で言った

「……一時的？」

「うん！ 二週間だけ。それで部員が集まれば正式に認めてくれる
って」

俺が疑問を口に出して呟くと月女は笑顔で語る

「二週間以内に集まらなかったらどうなるんだ」

「それは……“ なかったこと ” になるみたいだけど」

表情が曇り、消え入りそうな声で言う月女

「厳しい条件だね。やっぱり簡単にはいかないのかも」

夏葉は天井を仰ぎ見る

「厳しいの？」

「当たり前だよ……使い魔だってそんなに多くないし。使い魔が部
活動をするって自体が異例だし」

夏葉は月女を真っ直ぐも厳しい眼差しで見つめ、言った

「学校側は自由性が売りみたいだからな。絶対に駄目とは言えない
んだろうな……どうやらそういう条件を出してきたってことは学校
としては集まらないと思われているみたいだな」

「でもそこはかなり良心的。わたしたち含めて四人集まれば良いわ
けだから」

「あうう……駄目だったかなあ？」

小学生とは思えない学校の面子を理解しての会話に月女はオドオドしながら俺と夏葉を見る

「月女を一人で行かせたのは失敗だったかもしれないが……このままナメられたままじゃ引き下がれない。使い魔としての部活、認めさせてやるうぜ」

「あつ、うん！ 認めさせるよ絶対」

落ち着かない様子の月女を奮起を促す意味で俺は言う。それに月女は握り拳を作り、決意した様子だ

「そういえば部の名前が決まったよ！」

「そうなのか？」

「うん！ その名も使い魔部！」

凄くまんまだったが分かりやすい分、返って良いかもしれない

「ということ今からみんなで部員募集の貼り紙を貼りに行きたいと思っっていたりします！」

「まだ貼ってなかったの……？」

月女の言葉に夏葉は目を丸くして言った。それには俺もどう意見だった

「えつとその……月女はお兄ちゃんと夏葉ちゃんと一緒に貼りたいなって」

「これ月女たち、三人で頑張って考えて、書いたものだから貼ると

きも三人一緒が良いと思っただ」

ランドセルから昨日書いた部員募集の紙を見せながら月女は笑顔で言った

「いいなそれ。よし早速貼りに行こうぜ！ 夏葉も良いよな？」

「もちろん。三人で貼りにいこう？ 月女ちゃん」

「うん！」

そうして俺達三人は部員募集の紙をコピーすると初等部・中等部、高等部とそれぞれ貼って回った

「上手く貼れたね」

「うん、凄く上手だったよ」

校舎を出ると月女と夏葉はそんな会話をする。

俺は正直に言うのと貼り方に上手いも下手もないと思っただがそれは言わないでおく

「ん？ あれなんだ？」

校門を出たところで凄く長い高級感を漂わせる車があった。この世界にきて、自動車なるものがあることを知り、驚かされた

和海に与えられた“契約者の記憶”にはあつたが記憶で知っているものと実際に体験してみるとはだいぶ違っていた

「え？ あれって」

夏葉が何か言いかけると車のドアが開き、一人の女が出てきた

「お疲れさま月女ちゃん。そして月女ちゃん、わたくしのお友達と仲良くしてくださいありがとうございますとございますわ」

長い黒髪の女は月女を見るとにっこりと笑う。そして何故か俺と夏

葉の方を向き、礼を言った

「い、いえそんなことはないです……月女ちゃんにはいつも」

「だから誰だよ」

夏葉が何か言っている中、俺は無駄に長い黒髪の女を訝しげに目を細め見る

「貝螺木咲。月女の契約者 マスター だよ？ お兄ちゃん」

カイラギ サキ。変な名前だな

月女は貝螺木咲の隣に行くとその名前を言った

「そうか……お前が月女の契約者か。でも友達とか言っていなかったか？」

「そう月女ちゃんはおたくしのお友達。それに何か問題が？」

「べ、別に問題なんかねえが」

月女の契約者らしい貝螺木咲は俺が言っていると鋭い眼差しで言い返してくる。

「なら良いですわ。では行きましょう？ 月女ちゃん？」

俺の言葉に満足そうに微笑むと貝螺木は車の中に戻った

「あつ、うん！ それじゃあまたね。お兄ちゃんに夏葉ちゃん」

月女は俺たちにそう言っって手を振ると車に乗り、ドアが閉められる。

「うん、また」

「ああまたな」

俺と夏葉は月女の言葉に答えるように言った。

そして車は走り出し、あつという間に見えなくなった

「行っちゃったね」

「……そうだな」

月女がいなくなると急に静かになる。それが名残惜しいのか少しの間、俺達は車が走り去った方を見ていた

「んじゃ、帰るか」

「うん、そうだね」

いつまでもそうしてるわけにもいかない。俺たちは帰り道を歩き出した

和海と合流する地点までもう少しというところで、俺は違和感を感じて立ち止まる。

「？ どうしたの？ アークくん」

急に立ち止まった俺を気にして夏葉は尋ねてくる

「いや、ちよつと忘れ物をしちまったみたいなんだよな」

誰かに見られているような。いや確かに監視的な目は今までもあった。だがそれとは違う何か邪悪な魔力を微かに感じる

「そうなの？ じゃあわたしも」「ああ、すぐに終わるから先に行つてくれねえか？」

「えっ……でも」

俺は夏葉をじつと真っ直ぐに見つめる

「大丈夫だ。すぐに追いつくから何の問題もないからさ」

「うん分かったよ。じゃあ先に行ってるね？」

夏葉は空気を読める奴だった。そして素直で、それが何より今は助かった

「……ありがとな夏葉」

俺は夏葉が見えなくなると呟く。それと同時に目を閉じて集中する。気配を探るために

夏葉は安心だ

何故なら強面な男達がきつと眼を光らせてくれるからだ

「なるほど。雑魚みたいだが、今の俺にとっては、ちっとばかりキツイ相手だな」

俺は気配を探っていくうちに確信する。その感じた違和感の視線からは敵意も感じた

「つまり、俺狙いってわけか……」

夏葉が居た時はまだ様子見という感じだった。だからこそ違和感を覚えた

だが今はもう違和感なんてレベルじゃない

「居るんだろ……さっさと出てこい。俺はとっくに気付いちまっているんだぜ？」

俺はランドセルを地面に置き、周囲を見回し身構えて、居るであろう敵に話し掛けるように言った。

「おやまあ気付かれてしまいましたか。気配は消したつもりだったのですが」

一人の女が姿を現した。黒と紫を合わせたような尻尾の色

「お前……悪魔か」

「御名答。さすがは一騎無双を誇ったアーク様ですね」

「世辞はいい。何が目的だ」

俺はそいつを睨みつけて言う

「あはははっ！ それはもちろんあなたの排除。邪魔な存在は早々

にご退場願いたいではありませんか」

「ガキの俺をか？」

そいつはバカにしたように笑った。そして低い声、冷たい目で俺を見る

「またまた御冗談を。……ですがそれこそが私達にとっては好機でしてね？ あなたの力が不十分なうちにね」

「私達……？」

力が十分でないのは承知の上だ。だが

「ええええ……“私達”です」

その瞬間、俺の周りを囲むようにそいつとは別の悪魔が現れる。数は十五ぐらいか

「……殺る気満々か」

「それは当然というものです」

勝てるのか？ あるのか？ 今の俺にこいつらを退けられるほどの力が

でもやらねえとな。どうやら俺に選択権はないみたいだ

「早く終わらせないと。夏葉と和海も待たせてるからな」

悪魔達は臨戦態勢だ。

相手は武器を持っている……それは小太刀やら鎌やら様々だ
それに対して俺は武器なんてものはない。素手だ

「では早々に終わらせてあげましょう。やりなさい」

女の悪魔はその他大勢に命令を下した

「キシヤアアアッ」

すると一斉に悪魔は俺に向かって襲いかかってくる。

「くっ」

四方八方から繰り出される攻撃。そんなものは俺にかわすことは叶わない、ただ防御するしかない

「どうですかアーク様」今の俺にとっては攻撃をすることも無理だ防御するしかない。だが物理防御の魔力の壁も破られ、体に突き刺さる武器の数々。女悪魔の言葉など聞く暇もなかった

「集まりいいな……なら！」

そして俺は魔力の波動を爆発させた。その瞬間

「グギャアアアアッ!？」

悪魔共は清々しいほど簡単に吹き飛んだ

「はぁ……いつてえ」

俺はその隙に空中へ飛び上がり、浮遊して留まる

悪魔共は警戒してか見るだけで攻撃してこない

「どうした悪魔共。かかってこないのか？ 所詮は下級クラスの悪魔共だな怯えてやがるのか」

俺は悪魔共を挑発する。すると悪魔共はやはり一斉にかかってくる

俺はもうこの時、和海達のことを忘れていた。ただ戦うことに夢中になっていた

悪魔共を蹴散らすことを、悪魔共を倒すことで頭がいっぱいだった

第2話「使い魔のための部を作ろう」(後書き)

いよいよ使い魔部が動き出しそうです
頑張れ使い魔部！

そしてアークの命を狙ってるっぽい悪魔さん方

戦闘描写は久しぶりなのでちょっと不安だったりします

これから上手く書いていけたらいいな！

一応バトル物なので戦闘はそれなりにあります

でも本格的に戦うのはまだまだ先のお話

では

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1208z/>

使い魔部！

2011年12月29日07時52分発行